

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチ & デザインセンター
主任研究員 工藤 松太嘉



『印刷・紙づくりを支えてきた 34人の名工の肖像』

● 雪朱里著 グラフィック社 2500円+税

私の父は昼職人である。幼い頃からその仕事ぶりを見てきた。折込広告の裏を活用した粗末な無地の手作り帳面に、右耳に挟んでいた鉛筆で手早く平面図を描き、どんな形の和室にも寸法通り畳を合わせていく。その無駄のない動きや畳の針糸を肘の力で刺し通す音、大きい畳を軽々と持ち上げる力強さ。日頃の家庭での父の姿との違いに驚くとともに、新調された畳のイ草の香りが心地よい。父は生涯現役で今も健在だが、長らく勤め上げた会社は消費者の生活様式の変化の波に押しられ、のちに廃業してしまった。

技術やノウハウは本来、人に属するものだが、利便性や効率化の追求、破壊的イノベーションの波によって、どの業界でも機械設備やコンピュータシステム、会社に技術やノウハウはシフトするようになった。しかし、結果的にみれば、その寿命は職人の方が長いというのは皮肉な話である。

親から教わった「手に職をつける」という言葉は、子が親と同じ年月と経験を重ねた時に含蓄を増してくる。本書は、印刷や紙づくりの業界の名工たち34名のインタビューと貴重な現場写真やイラスト等によって構成された証言集となっており、その含蓄のある言葉で多くの示唆を与えてくれる一書である。

第1章「文字や組版を手がける人々」では、種字彫刻師、活字母型開発技師、活字鋳造職人、植字工、手動写植オペレーター等の見慣れない名工たちが登場する。不器用だった少年が住み込みの小僧（見習い）となり、厳しい師弟関係を経て、独立し、名工と呼ばれるまでの栄枯盛衰が語られる。「ベントン彫刻機」といった機械の普及、コンピュータによる「DTP」の普及等の転機をどのように乗り越えたのか。名工たちが復活していく姿が語られている。

第2章「紙を手がける人々」では、ファンシーペーパー開発者、抄紙機職人、揉紙職人、漆紙職人が登場する。日本を代表するグラフィックデザ

イナーの求めに応じ、100種類以上の紙を開発した裏話や、工場の中でどのように紙が作られているのか、頭の中に機械や紙の流れる音が聞こえてくるようだ。日本の「ものづくり」の現場が見えてくる。

第3章「製版・印刷を手がける人々」では、自動面付け製版カメラ発案、特色インキ調色師、金銀インキ調肉師、活版印刷職人、オフセット輪転印刷機職人、高級美術印刷摺り師等が紹介されている。CMYKといった印刷インキでは再現できない金銀や特別な色をどのように美しく刷るのか。こだわりの色には多くの名工たちの職人芸が隠されていることがわかる。

第4章「製本・加工を手がける人々」では、手差しラミネート加工、工業彫刻職人、箔押し職人、転写シール職人、製本職人、紙工職人、本函製造等の職人が紹介されている。書籍のカバーや雑誌の表紙、ファミリーレストランのメニュー等の日頃手にする機会の多い印刷物が、多種多様な後加工によって作られていることを知ることができる。擦るだけで布に転写できるシールや印刷した絵柄を盛り上げるためのシール、広辞苑のような分厚い製本等にどのような技術が使われているのか興味は尽きない。

相次ぐ震災や台風、大雨等を経験した時、父は被災した方々を回り、ボランティアで畳を直して歩いていた。そうした職人としての父の姿は、何もできずに見守るだけの愚息に人間としての本当の強さを教えてくれた。本書を読み終えて、そうした感情がふと心に蘇った次第である。

【著者略歴】

1971年生まれ。ライター・編集者。フリーランス。デザイン、文字、印刷、手仕事等の分野を中心に、ものづくりに携わる人々への取材執筆活動を行っている。著書『描き文字のデザイン』（グラフィック社）など多数。